

カトリック六甲教会 教会報

2013

4

No.496



主のご復活 & 新教皇誕生おめでとう！



主任司祭 松村 信也

ご復活おめでとうございます。そして入学、進級、就職、昇進、おめでとうございます。また遅ればせながら、何よりもカトリック信者にとり嬉しい、新教皇フランシスコ世の誕生おめでとうございます。幸運にも新教皇と共に迎える我が国の新しい年度は、会計年度も学校年度も四月一日から始まる世界でも珍しい国です。この年度システムは、明治時代から始まったと言われています。

この季節に合わせて新たな出発、新たな門出、そして新しく生まれるすべての萌芽は、始まりを大切にす日本人らしい発想ではないでしょうか。寒かった冬から抜け出し、ぽかぽかした温もりを運んでくれる春のはじまりは、人も自然もみんな元気に動き始めます。また優しさと温もりを載せた春は、すべての人に夢と希望を運んでくれます。そんな嬉しい気持ちを祝福してくれるのが桜の花です。

桜の花は、今年も去年と同じように、否、去年以上に見事な花を咲かせ、見る者に感動を与えてくれます。桜が何も言わずに人々に感動を与えることができるのは、何も言わないから感動を与えるのかもしれませんが。しかし、桜は人から褒められようが、けなされようが、毎年、春が来たことを知らせます。また、その春とともにイエス・キリストが復活したことを人々に知らせることを使命であるように咲き誇ります。

誰が頼んだわけでもないのに、誰もお金を払っていないのに、素晴らしい花を咲かせ、人々の心を潤し、癒しと喜び、そして感動を運んでくれるのです。

“桜”、この花は小さな花の集合によって桜の木全体を包んでいます。一つひとつの花は小さいけれど、みんなが一つに集まれば綺麗な薄桃色の見事な花、見る人々に感動を与えるゴージャスな花になるのです。言い換えれば、桜は私たち共同体作りの先駆けとなり、その模範を示しているようです。

桜の花をよく観察して見ると、みんな同じではないことに気づかされます。小さな花も大きな花も、少し形の違う花も少し色のあせた花もあり、みんな少しずつ違います。それでもみんなしっかりと一つの枝につながり、また少し大きな枝につながって、そして大きな幹と大地に降ろした根に支えられ、その根源から生命の水を吸収し、綺麗な花を咲かせるのです。

私達も桜の花と似ていませんか。み言葉を聞くために呼び集められ、主の食卓を囲んでしっかりとキリストのうちにつながり、キリストによって支えられ、キリストとともに神の愛を輝かせることによって、人々に慰めと喜びを運ぶことができる者になれるのです。しかし、たとえキリストにつながっていたとしても共同体から離れていては、誰にも気づかれることなく、一輪のままで終わるでしょう。

何もできない貧しい小さなたった一輪の花だけど、一人またひとりと大きく膨らんでいくほどに、神の愛をより鮮明に、より力強く、より深く、より優しく周りの人々にその香りを、その素晴らしさを届けることができるでしょう。

新教皇フランシスコ世と共に、キリストによって。



新教皇フランシスコ一世の選出にあたって



3月13日、全世界のカトリック教会を導くために、アルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿が新しく第266代教皇に選出されました。

新教皇はフランシスコ一世と名乗られます（呼称：教皇フランシスコ）。

カトリック教会は、第2バチカン公会議（1962年～1965年）開幕から50年を機に、昨年10月より1年間を「信仰年」と定めた前教皇ベネディクト十六世の意向に従い、公会議の精神に生きるように努めています。同公会議は、教会の現代化、世界の苦しむ人々との連帯、他宗教やキリスト教各派への敬意と対話を打ち出しました。また、「自分の懷に罪人を抱いている教

会は、聖であると同時につねに清められるべきであり、悔い改めと刷新との努力を絶えず続ける」（教会憲章8条）と宣言して、教会は常に回心する必要があると表明しました。教皇フランシスコ一世と共に、わたしたちはまず教会の刷新のために努力しなければならないと思います。

また、カトリック教会は、現代世界のさまざまな問題を解決するために関わっていかなくてはならないと自覚しています。たとえば、さらに深刻さを増した経済格差の是正。貧しい人、子ども、難民、女性の権利の擁護。受胎から自然死に至るまでのいのちを守ること。各地の戦争や紛争の中で、正義と人権、平和を実現するために献身すること。信教の自由の保証と宗教間の対話。宗教を理由にした暴力の根絶。原発などのエネルギー問題の解決と環境保護への努力。医療を受けられない人々への対応・保健活動。そして、移住者への奉仕などです。わたしたちカトリック教会は、国際レベルでも、国内レベルでも、すべての国、国連、国際機関、そしてすべての善意の人々との協力のうちに、これらの課題と取り組んでいこうとしています。教皇フランシスコ一世は全教会の賢明かつ力強い牧者としてわたしたちの働きを導き支え助けてくださることと確信します。

前教皇ベネディクト十六世の在任中に皆さまからいただきましたご厚意と、辞任を表明して以来、新教皇の選出に至るまで、教会に大きな関心を寄せてくださったことに感謝いたしております。そして、新教皇とともに始めるカトリック教会の新たな歩みに、これまでと変わることはないお力添えをいただきますよう心からお願いいたします。

神の祝福が皆様一人ひとりに豊かにありますようにお祈り申し上げます。

日本カトリック司教協議会会長
大阪大司教 レオ 池長 潤



！！！！ **Viva** 新教皇フランシスコ一世 ！！！！

ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿は1936年12月17日、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスに生まれました。ラテンアメリカからの教皇は初めてで、バチカン放送によるとイエズス会からも初の教皇であると報じられています。

1958年 プエノスアイレス大学で化学を学ぶが、イエズス会に入ることを決心し、ビジャ・デボトの同会神学院に入った。
1969年 12月13日、司祭に叙階。
1973年に終生誓願宣立。イエズス会のアルゼンチン管区管区長に選ばれる。
1980年 サンミゲルのビジャ・バリラリ神学院で修練院長を務める。
1987年 東京・イエズス会上石神井神学院来訪。
1992年 5月20日、プエノスアイレス教区補佐司教に任命。
1997年 6月3日、同教区協働大司教に任命。
1998年 2月28日、同教区大司教として着座した。
2001年 ヨハネ・パウロ二世より枢機卿に任命。



「本当の人生」を受け取るとき

～名誉教皇ベネディクト16世の模範に倣う～

片柳弘史(助任司祭)

「教皇職を受けると決断した時にもっとも重く感じたのは、その瞬間からいつでも、そして永遠に主に捧げられた者になるという事実でした。教皇職を受ける者には、もはや私生活はありません。教皇はいつでも完全にすべての人のものであり、教会全体のものです。人間は人生を捧げ物として神に差し出すまさにそのとき、本当の人生を受け取るのだと、私は感じてきたし、今この瞬間も感じています。」

この言葉は、名誉教皇となられたベネディクト16世が、教皇職から退く直前の一般謁見で語られた言葉です。

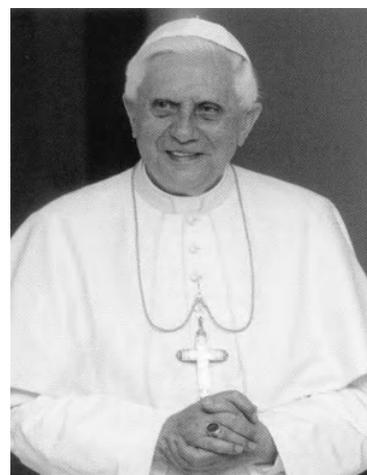
「人間は、人生を捧げ物として神に差し出すまさにそのとき、本当の人生を受け取る」、最初に読んだとき、この言葉がわたしの心に深く突き刺さりました。わたしたち人間は、自分の人生にしがみついている限り、「本当の人生」を生きることができないというのです。

「本当の人生」とは何でしょう。それは、神が望まれるままに生きる、本当に人間らしい、自分らしい生き方のことだと思います。神の望みのままに生きることこそが、わたしたちの人生の本来の姿であり、「本当の人生」なのです。

神の望みは、ときにわたしたち自身の望みとは大きく異なる場合があります。わたしは今のこの快適な生活にとどまりたいのに、神はわたしをどこか別の場所に派遣したいと望んでおられる。わたしはあの人を絶対にゆるしたくないのに、神はゆるすようにと望んでおられる。そんなことがあるのです。

そんなとき、いつまでも自分の思いにしがみついているならば、わたしたちの心はかき乱され、不安や怒りでいっぱいになってゆくでしょう。自分の思いのままに生きる人生を手放し、自分の人生をすっかり神の手に委ねるときにだけ、喜びに満たされたわたしたちの「本当の人生」が始まりまるのです。ベネディクト16世は、教皇としてあらゆる私的な生活を神に差し出し、自分の人生をすっかり委ねきることによって、それをはっきりと感じ取ったのでしょう。

名誉教皇ベネディクト16世の模範にならって、わたしたちも、自分の思いのままに生きる人生を神の手に差し出し、神の御旨のままに生きる「本当の人生」を頂きたいと思います。





新シリーズ

「何でも知っとこ」(1)

“復活祭”

復活祭とは、キリスト教典礼の一番大切なお祝いの日です。それはイエス・キリストが十字架にかけられて死に、そして三日目に復活したことを記念する日です。

私たちは毎日曜日、週のはじめの日を「主の日」と呼び、キリストの復活を祝う日として、一週間の中心となる“はじまり”としています。この「主の日」には、ただ復活を祝うことだけではなく、**過越の聖なる三日間**であるイエス・キリストの受難と復活（十字架につけられ、葬られ、復活されたキリスト）を祝うことでもあります。それは「主の晩さんの夕べのミサ」からはじまり、復活主日の晩の祈りまでの全過程をさします。つまり、受難と十字架を通して、死から生命へ移られるキリストの**過越の神秘を祝う三日間**を指しています。その過越の神秘を祝う三日間について簡単に説明します。

第一日目： 「主の晩さんの夕べのミサ」（聖木曜日）では、キリストが聖なる体（ご聖体）となり、ミサ聖祭を実施、司祭職の秘跡を制定した最後の晩さんの記念を行います。ミサの中では任意に洗足式と聖体安置式があり、具体的な神の愛であるご聖体と兄弟愛のしるしを思い起こさせます。

第二日目： 「主の受難」（聖金曜日）では、キリストの受難と死の記念日です。キリストの死を黙想するとともに、十字架の勝利を賛美するために十字架の顕示の後に、十字架の礼拝式が行われます。尚、聖金曜日と聖土曜日は主が死去し、墓に安置された日であるという初代教会からの伝統にはじまり、この両日に限ってミサは行われません。

第三日目： 「復活の聖なる徹夜祭」（復活の主日）では、初代教会からの伝統に基づいて、その夜は神のために守る徹夜とされています。参列者は灯りをともして主の帰りを待つことをあらわすために「**光の祭儀（第一部）**」があり、それに続いて聖なる教会は、神が始めからご自分の民のために行われた偉大なわざをしのびつつ、また神のことばと約束に信頼しつつ徹夜しながら「**みことばの祭儀（第二部）**」を行い、やがて復活の日が近づき、「**洗礼式（第三部）**」によって新しく生まれた教会の成員とともに、主が死と復活を通して私たちのために準備された食卓に招かれる「**感謝の祭儀（第四部）**」が行われます。

この過越の神秘を思い起こしながら「主の日」を祝うことが、毎日曜日に捧げられるミサでもありません。



ご復活といえは、よく耳にする「**イースター (Easter)**」という言葉です。この言葉は、英語で復活祭のことを言います。東方教会（ギリシャ正教、白系ロシア教会等）では、「イースター」よりもむしろ「**パスカ (Πάσχα)**」とか「**パスハ (pascha イエスの活動した地方のアラム語)**」と呼ばれる方が好まれています。

復活祭は基本的に「**春分**」の日の後の最初の**満月**の次の**日曜日**に祝われるため、年毎に日付が変動する祝日です。また東方教会と西方教会（カトリック、他プロテスタント）の復活祭は、年によって祝日が異なります。

さて復活祭には、必ず子供たちのお楽しみである色のついた卵（**イースター・エッグ**）が配られます。**イースター・エッグとは**、卵から殻をやぶって雛が生まれることから復活を表しています。その新しい命をもつ卵を復活のシンボルとして、必ず復活の日に配られるようになりました。イースターを祝う国

《 お 知 ら せ 》 教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★社会活動部より★

4月3日(水) 10時 手芸の集い(第1・2会議室) どなたでも参加ご自由です。

4月13日(土)9時30分 炊き出し(イグナチオお台所) 毎月第2土曜日

小野浜グラウンドにて配食や、おじさん達のお話し相手だけでもOKです。

4月21日(日)10時 ミサ後 ふれあい広場(イグナチオホール)

お弁当・手芸品・雑貨等の販売。東北支援物産店。



★手作りコーナーからの御報告★

教会の活動の一つとして毎月第3日曜日、イグナチオホールで手作りのお弁当、すし、ケーキ、手芸品などを販売しています。基本メンバーは10名ですが毎回お手製のケーキ、パン、ジャム、手製カード、お米など信徒の皆様からご寄付を頂いています。一方では信徒の方々にお買い上げ頂いております。いつも温かいご支援にメンバー一同心より厚くお礼申し上げます。

ご協力金の中から諸団体に寄付させて頂きましたことご報告いたします。これからも皆様のお気持ちを支えに細々ながらこの活動を続けて参りたいと思っています。

共同体の方々との交わりの中で祈りながら活動できますように願っております。本年度もよろしくお願ひ申し上げます。

感謝と祈りのうちに 手作りコーナー一同

★墓地っ子だより★

3月10日(日) 春の墓参を行いました。五体の納骨がありました。

さて、これを春の嵐と言うのでしょうか、強風、長峰おろしをまともに受けました。花やお骨袋が飛ばされたりしてヒヤッとしましたが、納骨の式に入りますと参列の皆さん方は集中して祈っておられホッといたしました。

その後の一般墓地の祝福の時も強風は容赦なく襲いかかって来ましたが、松村神父様に頑張っていただき無地終えることが出来ました。

雨に関しては滑り込みセーフでしたので、神様が少し加減していただいたようです。穏やかな墓参とは違いまた印象に残るお墓参りでした。

S F



<春の墓参の風景>

～．

「ありがとう。これからもよろしく！」

一昨年、シスター・古屋敷（援助会）を広島に送り、昨年はシスター・出口（援助会）を東京に送り、そして今年は、シスター・小沢（FMM）を福島の南相馬の原町教会へお送りすることになりました。これが現在の教会の現実とはいえ、私たちの小教区にとって毎年大きな痛手となっています。しかし、貴重な宝であるシスター方を必要とされている場所にお送りすることは、明日の教会にとって喜ばしいことでもあります。

これまで六甲でのシスター方の寛大なご奉仕に心より感謝すると同時に、これからもそれぞれの派遣先においてご活躍され、心身ともに健康で神の国を証されますよう、心よりお祈りします。本当に長い間、ありがとうございました。これからも機会がありましたら、どうぞご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひします。

主任司祭 松村信也



~~~~ 四旬節から聖週間、そして復活の主日 ~~~~

教会典礼の頂点である聖なる過越しの三日間を経て復活祭を迎えました。

聖週間からご復活にかけては特別な祭儀がありますから、小教区の信徒の祈りと様々な奉仕が結集された典礼でもあります。これからも共に捧げる典礼としていけるよう努めていきたいです。

(典礼部)

「受難の主日」の枝の準備風景



<枝の刈り取りをしています>



<枝の整理をしています>



<整理された枝の下の方の葉をとって、持ちやすく仕上げます>



<こうして準備された枝が受難の主日に信徒のみなさまに配られます>

## お知らせ

### 主日 7時ミサの時間変更について

今年度4月7日（日曜日）の復活第2主日より、毎日曜日（主日）7時のミサを30分遅らせ、7時30分に時間変更します。ご都合の悪くなった方が、いらっしゃるかもしれませんが、よろしくお願いします。尚、平日（月～土）7時のミサは、変更ありません。お間違いのないようにお願いします。

|           |    |   |          |
|-----------|----|---|----------|
| 日曜日（主日）   | 7時 | ⇒ | 7時30分    |
| 平日（月曜～土曜） |    | ⇒ | 変更なし（7時） |

### 海星病院のミサ・集会祭儀について

病院内チャペルに安置していました聖櫃は、司教様からの申し出により、2月末日付けにて取り除きますが、主日のミサ・集会祭儀は、従来通り行います。

但し、**集会祭儀につきましては、4月7日（復活節第2主日）日曜日より、聖体拝領の伴わない祭儀**になることをお知らせします。尚、うみのほし、海星病院に入院中のカトリック信者の方でご聖体を受けられる方は、係りの者あるいは教会までご連絡して下さい。

ご連絡して戴いた方は、従来通りミサ・集会祭儀の始まる迄に、ご聖体をお運びいたしますので、よろしくお願いします。 連絡先：カトリック六甲教会受付 078-851-2846





## みんなの広場

### あの日を忘れない

相澤（仙台在住）

あの日、愛する人、大切な故郷、自分たちの築きあげてきた物が一瞬にして奪われました。心に負った傷はとても深く、まだ癒されず、悲しみを抱えたまま2年という時間だけが過ぎていきます。今でもあの日のできごとが夢であって欲しいと思います。

少しずつ、被災地は復興へと歩みを進めています。しかし、メディアが報じているほど進んでいないのが実情。メディアでは沿岸地域の報道が多いようですが、内陸部で被災に遭い、仕事も家族も家もすべて失った方も少なくありません。ダメージがあまりにも大きすぎて、個人では再建するのは難しい。進まないガレキ処理、処理が終わっても更地状態のところほとんど。沿岸部地域（仙台市六郷・七郷、名取市など）の田畑の除塩作業の遅れ（津波によって田畑に海水が流れたため）、名取市閑上（ゆりあげ）港、石巻、気仙沼あたりの漁船の流失や岸壁の損壊で操業ができない漁業状態（大きな所は元気を取り戻しつつあります）。それでも、被災者の方々はこれから先の不安を抱きながらも、仮の住まいで、復興に向かって頑張っています。

同じ被災地に住む者として、何かできることがないかと思い、震災後から支援活動をしています。大きな仮設住宅や、避難所には、救援物資が届きますが、借り上げの住居の方や住居地域を変更された方、一人住まいの老人へはなかなか救援物資が届きません。また、物が流されているのにローン（家・農機具等）を支払っている方々もおり、生活がままならない状態の方々がおられます。そういった行政の行き届かない方々へ、支援物資（日用雑貨・衣類・お米など）を支援しております。

同じ仙台市内でも中心部と被災した郊外とは温度差があり、忘れ去られようとしています。支援してくださる方がいないと私たちの活動は成り立ちません。忘れないで欲しい。

今回の震災は地震のみならず、津波・原発事故が加わったために被災者、地域が抱える問題が異なります。個人、地域別の細やかな支援が必要。行政の手の届かないところでの支援をこれからも行っていきます。被災者の心に寄り添うのは難しいですが、彼らの小さな喜びを共に喜び、その喜びを重ね、希望へつなげたい。「取り戻したい！」「取り戻そう！」きっと訪れる復興の春に希望を抱きつつ。

当初、知り合いから物資を支援してもらい、次第にその輪が広まり、今では仙台正平教、東京・横浜、大阪の浜寺教会、泉佐野教会の方々から支援を受けております。

先日、3月11日、仙台のいろいろな所で慰霊祭が行われました。神戸からのボランティアの方が大勢参加されていました。「同じ経験をしたので何かしたいと思って」と、話されていました。今後も個人の方々の復興のためにお互い助け合いながら頑張っていきたいと思っています。



仙台市沿岸部。瓦礫置き場。  
未だ片付けがすすんでない。



名取市閑上。住宅地だったところが荒地になったまま。



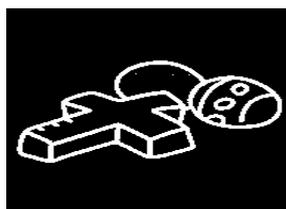
仙台市沿岸部。  
田んぼ除塩作業中。

F i a tと言っても車の話ではない。3月25日は「神のお告げ」の祭日だが、今年は聖週間中になって祝われなかった。この救いの歴史で無視できない出来事は、復活節中に改めて「復活節第2主日」の翌日、今年は4月8日に祝われる。

「復活節第2主日」の福音はディディモのトマのことが読まれる。トマの「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」は現代そのままだが、マリア様の「f i a t」とは両極のように思われる。両福音を合わせて読んでみるとよいのではないか。

「お告げ」は主の直弟子ではないルカが口伝を集成したものとされる「ルカによる福音」中にしか見られない。直弟子ではマタイの福音の中にさもありなんとさせる記述が見られるが、それはルカの福音を読んだ上のことだろう。描かれたお告げのマリア様は美しい貴婦人だし、聖イグナチオも霊操の中で「われわれの貴婦人」(門脇訳)と呼んでいるが、当時の習慣を考えるとヨセフの許嫁であったマリア様は15、6の今でいう女の子だったのではなかったか。「F i a t」とお告げを受け入れたマリア様がお告げの意味を完全に理解されたのかはわからない。ルカは後に神殿で主が行方不明になったときは「両親には、イエスの言葉の意味が分からなかった」と、又ナザレでの日々の中で「母はこれらのことをことごとく心に留めていた」と、更にマリア様が主の十字架に立ち会われたと書き残しているから完全に理解できないままに「お告げ」を受け入れられたのではなかったか。トマは違っていた。彼はあくまで自分が主であった。自分は体験していない、だから認めない。神は創造の最初からマリア様を定められた。それでもマリア様の "Fiat" は自由にご自身で神の導きを受け入れた "Fiat" であった。本当に "Fiat" が言えるだろうか。

ミレーの「晩鐘」は知っているが「お告げの祈り」を知らない信徒もいるようだ。「お告げの祈り」(復活節中は「アレルヤの祈り」)「食前の祈り」「食後の祈り」「始業の祈り」「終業の祈り」など、特に大仰な動作はいらない、道を歩きながらでも、食卓の準備をしながらでもできる。ただ、言葉の向かう先をしっかりと意識していないと独り言になってしまう。昔の文語体は簡潔だったが最近の口語体はどうしても冗長になり覚えにくい。僕は今も文語だ。(終)



**H A P P Y E A S T E R !!!**

|                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                                                                         |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>教会報 5月号の発行は、4月28日(日)です。<br/>                 編集会議 4月21日(日)です。<br/>                 記事原稿は、4月14日(日)正午までに信徒会館<br/>                 受付へご提出願います。 (広報部)<br/> <a href="http://www.rokko-catholic.jp">http://www.rokko-catholic.jp</a></p> | <p>カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会<br/>                 〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21<br/>                 電 話 078-851-2846<br/>                 F A X 078-851-9023<br/>                 発行責任者 松 村 信 也<br/>                 編 集 広 報 部</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|